

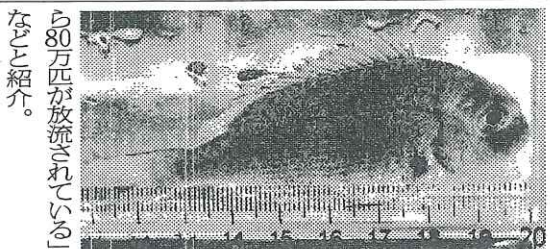
名向小3年生が参加

マダイ稚魚500匹放流

元気でネと声をかけ、手を振る児童も

みうら学・海洋教育研究所のような『ウォータースライダー』式の器材を使って、湾内に放流された。この器材の上には常に海水が流され、魚が傷つかないよう工夫されている。

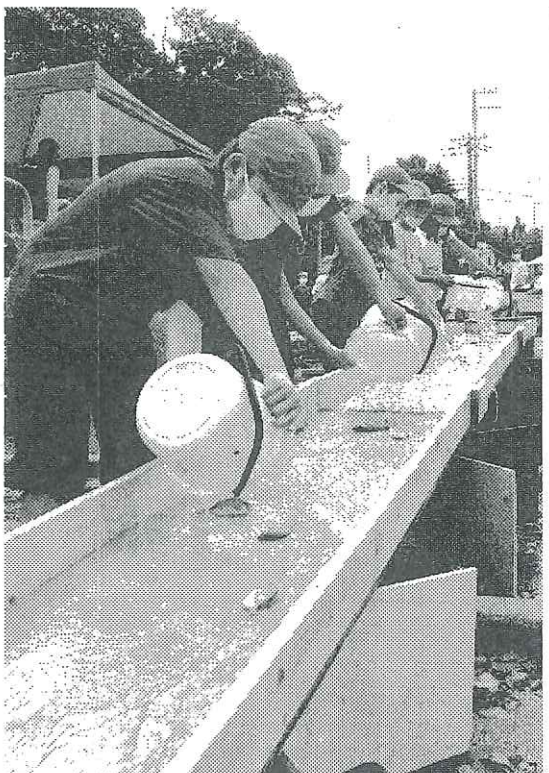
放流に先立ち、海洋教育ミニ講座が開かれ、同協会専務理事で元県水産技術センター所長の今井さんが臨時講師を務めた。今井さんはマダイが卵から孵化して稚魚になるまでや海上のイケスに移されて放流するまでをわかりやすく解説。「標識をつけたマダイが20年後に大磯で捕獲されたことがあり、養殖されたマダイが最低でも20歳に達していたことがわかった。放流は毎年神奈川県から静岡県にかけて行われ、70万匹か



ら80万匹が放流されている」などと紹介。

また、今井さんは背後の小網代の森と小網代湾が密接に繋がっているとし、小魚の稚魚はアマモやカシメをゆりかごに成長する。海水温が上昇し、アマモやカシメが枯れてしまい、海底が砂漠化している。海藻の

友達なら
みんなの個性
みとめあおう



ウォータースライダーで滑り落ちていくマダイの稚魚と放流された稚魚④

中には花が咲き、実をつけて増える種類もある。回復させるには時間がかかるが、再生は絶対必要！などと力説した。

放流は小パール隊員がバケツに5〜6匹入れて児童に渡され、『密』をさけるため一度に5人前後が放流した。放流に参加した青木玲音(れおん)君は「最初水槽に入っているマダイをすくうのを見て、まるで金魚すくいのようなだった。バケツから流したが一匹逃し、手で放流した。パイパイと声をかけた」などと感想を話していた。

小網代パール隊は小網代の海を舞台に地域と一緒に環境を学びながら守っていくことを掲げる海洋教育最前線の団体。稚魚放流のほか真珠養殖、アマモの再生などを通してみんなが海を知ったり、楽しんだりする機会を提供して『みうらっ子』の育成に貢献している。